

平成 21 年度 広島経済大学経済学部 卒業論文

輸出依存型経済から脱却する為に  
～日本の商品力を高めるための一考察～

広島経済大学 経済学部

ビジネス情報学科

1814103 兼安紘平

## 目次

|                        |    |
|------------------------|----|
| 論文要旨 .....             | i  |
| 1 はじめに .....           | 1  |
| 2 日本の貿易の現状 .....       | 2  |
| 2.1 日本の輸出入総額 .....     | 2  |
| 2.2 対米中輸出入比較 .....     | 3  |
| 2.3 対ロシア、中東貿易の現状 ..... | 4  |
| 3 日本の資源依存 .....        | 5  |
| 3.1 日本の石油依存 .....      | 5  |
| 3.2 日本のレアメタル依存 .....   | 7  |
| 3.3 日本の天然ガス依存 .....    | 11 |
| 4 低下する日本の技術とブランド ..... | 13 |
| 4.1 追い抜かれる日本製品 .....   | 13 |
| 4.2 日本製品の停滞要因 .....    | 14 |
| 5 新たなブランド .....        | 16 |
| 5.1 サブカルチャーの輸出 .....   | 16 |
| 5.2 食文化の輸出 .....       | 16 |
| 5.3 日本をアピール .....      | 18 |
| 6 終わりに .....           | 20 |
| 参考文献 .....             | 21 |

## 論文要旨

輸出依存型経済とはどんなものなのだろうか。日本が世界の貿易で置かれている立場は微妙なもので、輸入する相手国とも輸出先の国とも外交などの付き合いを上手くして行かなければならない。つまり、リアクション型の経済ともいえる。世界の国では自分達から行動できるアクション型の経済と受身であるリアクション型の経済をうまく使い分けている国が世界でも存在感を示すことができている。日本は石油、レアメタル、天然ガスなどの資源が乏しく世界 2 位の GDP を誇る国としては立場が弱い。しかし、経済活動が続けるためには貿易を通じて資源を確保し続けなければならない。

私は自分達から市場を提供できる経済こそが輸出依存型経済から抜け出すため鍵であると考えている。つまり関係国に自分達から働きかけていける経済や魅力的な市場を持つことが大切なのだ。そして自分達の国の経済状態に合わせて経済活動を柔軟にすることができれば日本の世界での競争力は今より良い状態になるだろう。そのような経済活動にはどのような方法が有効か本論文で考察したい。

## 1 はじめに

この論文を執筆しようとしたきっかけは、私が就職活動を始めたときにリーマンショックによる金融危機が始まり、突然の景気の下降ぶりに日本の経済の危うさを感じたからである。日本は他国から資源を輸入して工業製品を製造し、米国や世界各国などに売る加工貿易で経済が成り立っている。それゆえリーマンショックによる世界的な不況は日本にとって死活問題であり、工業製品を輸出して利益を得ている日本経済は、貿易相手の国が経済危機に陥れば同時に危機に陥ってしまうのである。どんなに日本の労働者が必死に働いても貿易相手国の経済により日本の経済が影響を受けてしまうのが現状である。そして最近では日本の重要な貿易相手であるアメリカをはじめとする国々に自国保護の空気が高まっている。例を挙げると、米国のオバマ大統領は※バイ・アメリカン政策<sup>1</sup>を訴え部品の調達までも自国で行おうとしている。日本の重要な貿易相手である米国などがそのような政策を推進すると日本はどうなってしまうのだろうか。

私は一連の問題が起きてから一つの考えを持つようになった。世界経済に左右されず安定した経済を目指すためには、日本の経済・産業構造を変えることである。日本は工業製品を主に輸出している貿易立国だが、これからは多方面での貿易立国を目指すべきである。もっと知財ビジネスに力を入れて、技術力をより向上させなければならない。日本が持っている技術・ブランドイメージを前面に押し出し世界各国とビジネスで関係を深め、日本独自のノウハウやロイヤリティを付け世界各国にばらまけば資源が乏しい日本でも十分な貿易ができる。例えば日本の農作物は味、品質共に素晴らしいことから香港などでは評判が良くとても高値で売れる。その対象を香港だけでなく台湾や中国などにも広げていけば日本にとって十分な市場になるだろう。輸出相手を特定の国だけにしぼらず、可能な限り、世界各国を相手にすれば相手国の経済にも過度に介入しないため貿易摩擦も起きにくいのではないだろうか。日本はこのようなビジネスに力を入れるべき時期に来ているのだ。

このようにこれからの日本の経済・産業構造を転換することができればもう世界の経済状態に一喜一憂することなく、安心して日本のお父さん達が働くことができるのではないだろうか。もちろん今までの産業を維持し、新しい産業と合わせて発展していくことが理想的だ。

以下、第2章で日本の貿易の現状を考察、第3章で加工貿易に必要な資源の依存を考察する。第4章で日本の技術力の危機を考察し、第4章では日本の新たな輸出品を提案したい。第5章では輸出品を世界に広めるための戦略を提案する。第6章おわりにでは、論文をまとめると同時に残された課題を提示する。これがこの論文の構成である。

---

<sup>1</sup> アメリカの自国製品優先購入政策をいう。

## 2 日本の貿易の現状

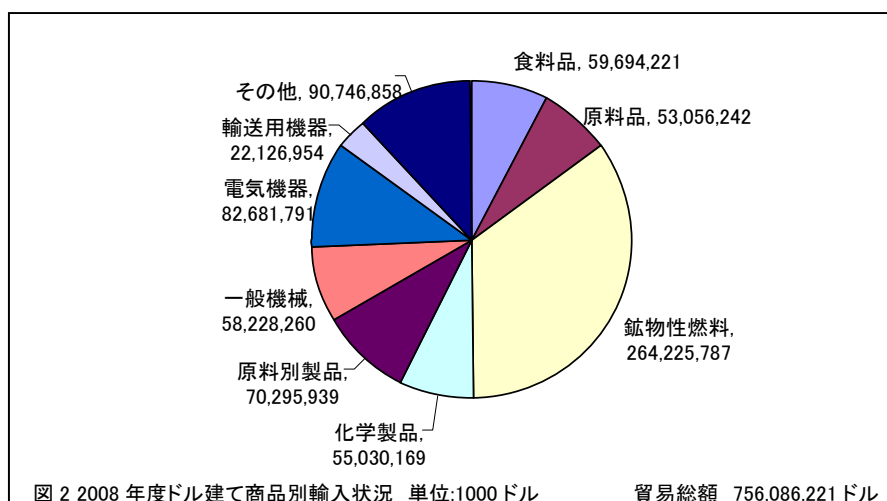
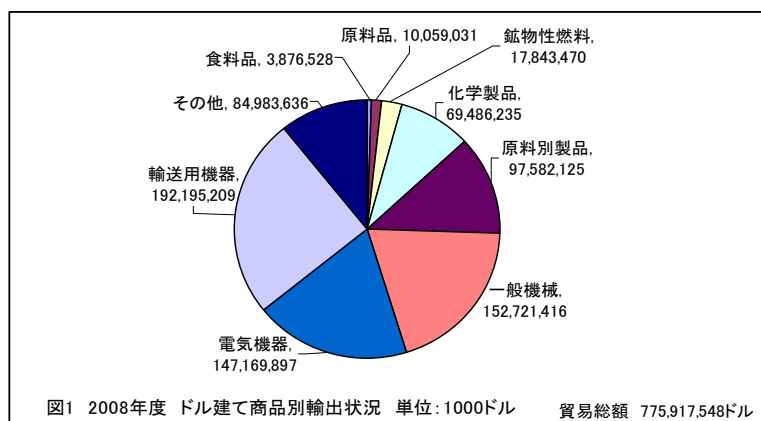
この章では、日本と主要貿易相手との現状を考察し、日本の加工貿易の現状と各国ごとの貿易の特徴を考察する。

### 2.1 日本の輸出入総額

この節では日本の輸出入の現状を考察する。

図1は2008年度の日本の輸出総額だが、加工品でない物の割合は少なく輸出総額775,917,548ドルの内、31,779,029と極めて少ない。内訳は食料品、鉱物性燃料、原料品などである。残りの744,138,519ドルはほぼ何らかの加工を加えてある商品が多い。

図2は2008年度の商品別輸入状況である。貿易総額は756,086,221ドルと輸入とあまり変わらないが、内訳が大きく異なっており、原料や資源の割合が大きくなっているのがわかる。



出典：『ドル建て貿易概況－日本－ジェトロ』より作成

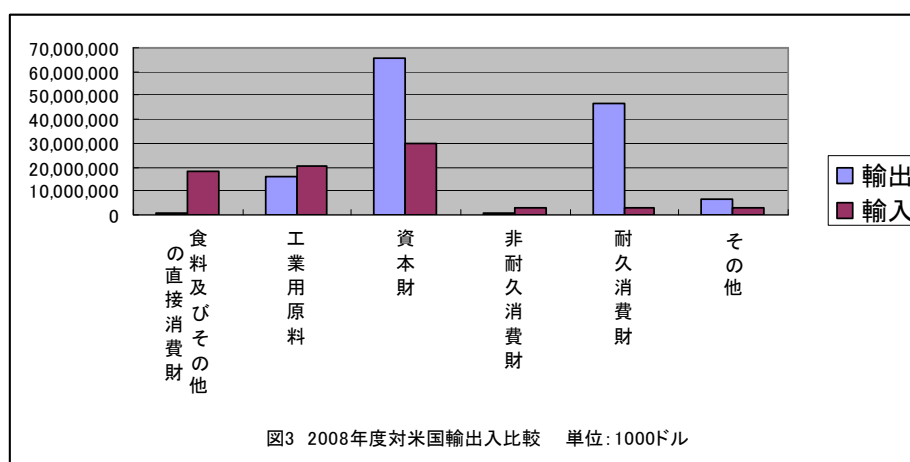
食料品、原料品、鉱物性燃料などの資源などを合計すると、376,976,250ドルとなり、約半分を占める。そして他項目の電子機器なども、部品などが主であり完成品を輸入してはいない。図1と図2の輸出入の金額や内訳を見て日本は他国から原材料や部品を多く輸入し、

加工をして他国に電子機器や自動車売っている加工貿易を主とした工業国とも言うて良いだろう。

工業国は資源が豊富であれば強みになりえるが、資源が少ない国では工業製品の原料すらも資源の豊富な国から輸入をしなければならない。資源を買う国と製品を売る国との間に挟まれてどちらかの国が日本との関係を切ってしまうと、すぐに経済が失速し日本は終わってしまう。

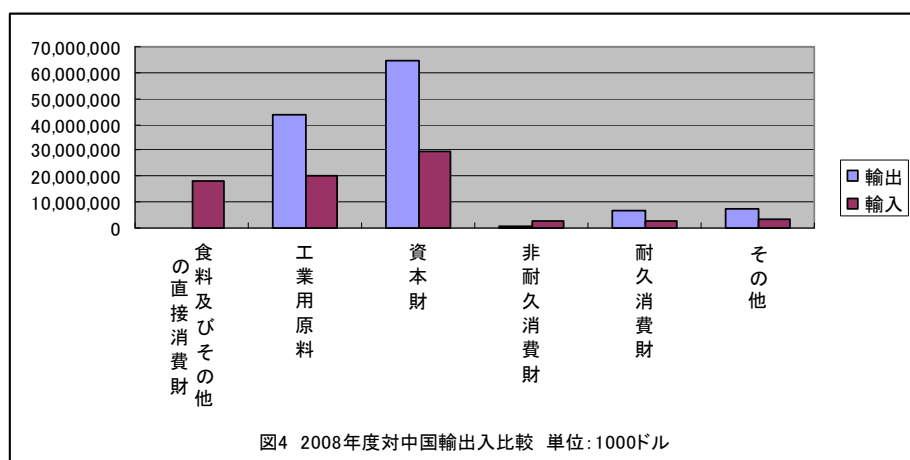
## 2.2 対米中輸出入比較

この節では日本の2大貿易国である米中との貿易の現状を考察したい。



出典：『ドル建て貿易概況－日本－ジェトロ』より作成

図3は対米国の輸出入の比較グラフである。輸入している額も少なくはないが、やはり輸出が上回っているのがわかるだろう。特に多いのが資本財の項目で、これは電子機器や一般機械が含まれている。そして次に多いのが耐久消費財の項目で、これは自動車などが含まれている。つまり、アメリカ向けの輸出は電子機器や車などが多いのがグラフより読み取れる。

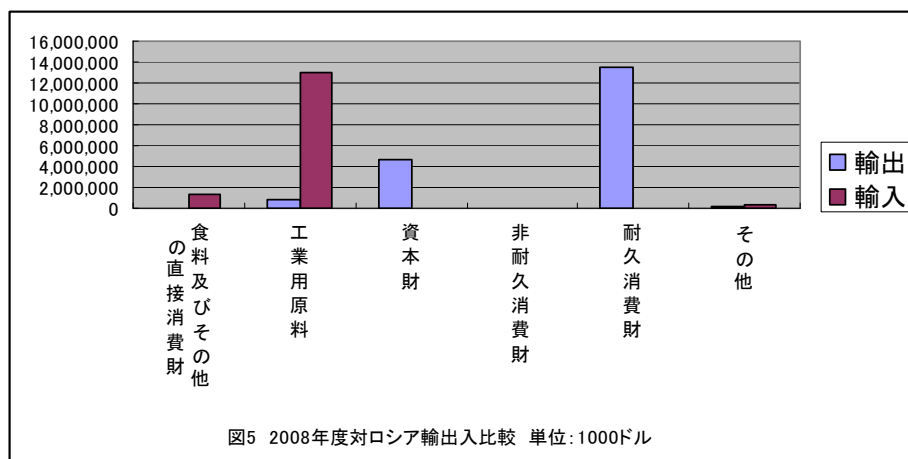


出典：『ドル建て貿易概況－日本－ジェトロ』より作成

図 4 は対中国との輸出入比較グラフだが、対中国との輸出入はアメリカとは少々異なっている。食料品はほぼ輸入だけで、工業用原料、資本財ともに輸出入の額が多い。つまり、中国とは資源面での貿易が多いことがわかる。

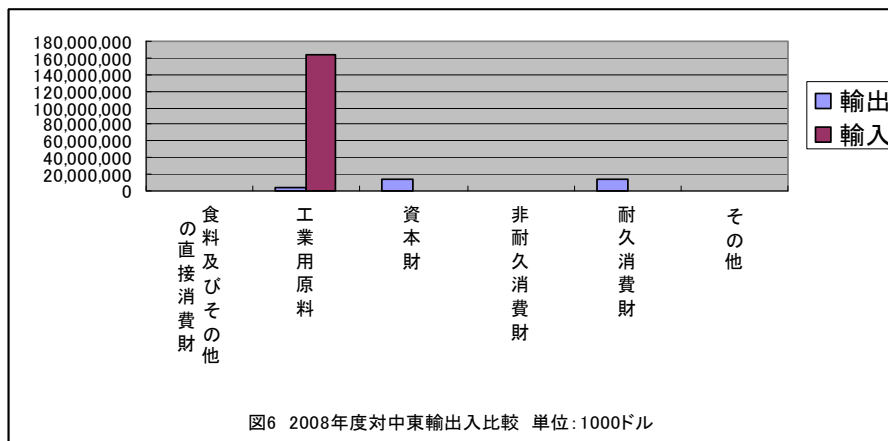
## 2.3 対ロシア、中東貿易の現状

この節では対ロシア、中東との貿易の現状を考察したい。



出典：『ドル建て貿易概況－日本－ジェトロ』より作成

図 5 はロシアとの輸出入比較グラフであるが、ロシアとは工業用の原料をほぼ輸入に頼り、自動車などの耐久消費財を輸出している。ロシアとはこの 2 項目が主な輸出入項目であり、資源を輸入し、車などを多く輸出している。



出典：『ドル建て貿易概況－日本－ジェトロ』より作成

図 6 は対中東との輸出入比較のグラフであるが、他の貿易主要国とは違い、ほぼ工業用原料の輸入が主である。図 3、図 4、図 5、図 6 から日本は中東をはじめとした資源産出国から原料を輸入し、米・中・露などの主要国と加工貿易をしているのである。

### 3 日本の資源依存

経済活動においては石油、レアメタル、天然ガスなどの資源が重要であるが、その資源が他国の事情により左右され、いかに日本の経済活動が受身であるかを考察する。

#### 3.1 日本の石油依存

この節では日本がいかに経済活動において石油に依存しているかを考察し、資源で重要な位置を占めているかを述べたい。

日本は GDP が 497 兆 6771 億円で世界第 2 位の経済大国である。その経済活動と豊かな生活を支えているのが石油であり、図 7 で示しているとおりの日本のエネルギー構成の約半分を占めている。

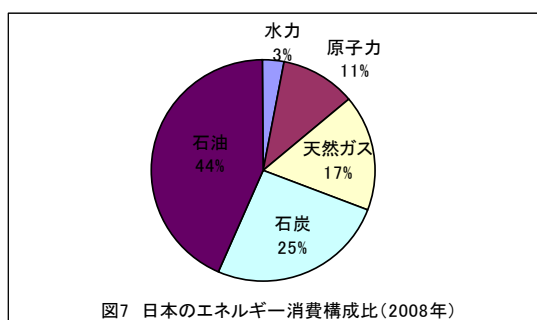


図7 日本のエネルギー消費構成比(2008年)

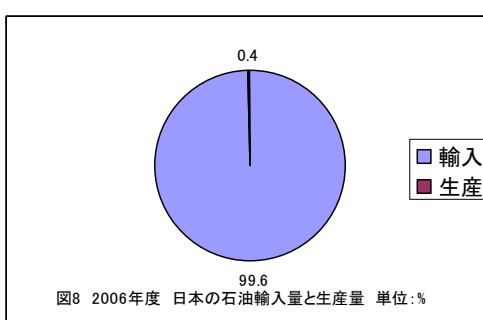


図8 2006年度 日本の石油輸入量と生産量 単位:%

出典：『石油連盟 石油統計情報 今日石油産業データ集 国内石油需給動向』より作成

出典：『日本の資源とエネルギー - 日本の石油天然ガス事情』より作成

日本は石油を年間約 2 億 4,300 万キロリットル輸入しており、図 9 をみると 484 万 5000 バレルを消費している世界第 3 位の石油消費国であることもわかる。この事を意識している日本人はどれくらい居るだろうか。

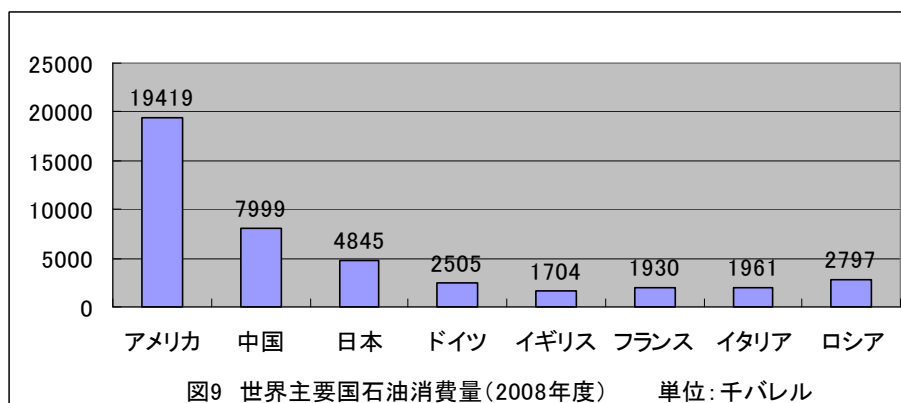
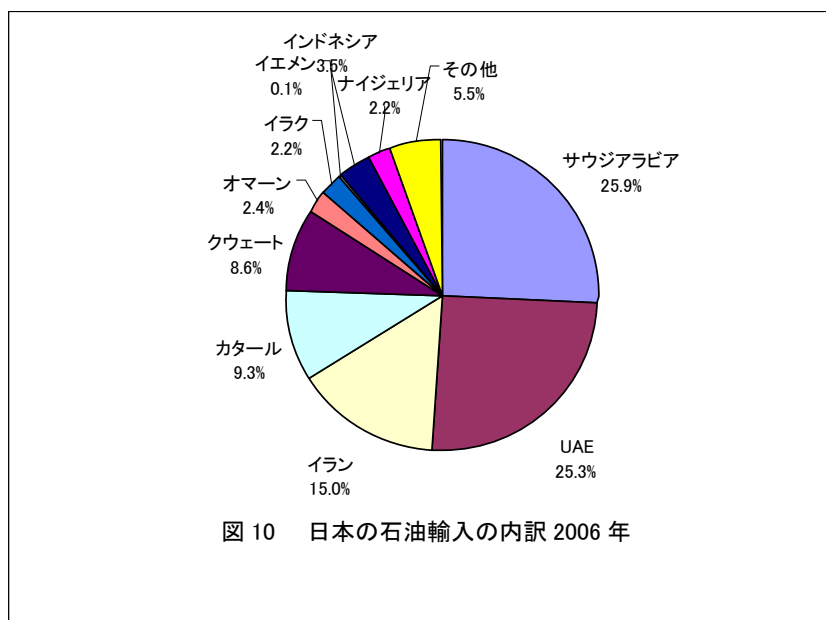


図9 世界主要国石油消費量(2008年度) 単位:千バレル

出典：『石油連盟 石油統計情報 今日石油産業データ集 国内石油需給動向』より作成

図 8 を見ても分かりますとおり、日本は、経済の血液や養分ともいえる石油をほぼ 100%外国から頼っている。もし産油国や資源生産国の政情が悪化して、その国が他の国に輸出をシフトまたは、ストップしてしまえば、すぐに日本の産業・経済はストップしてしまうだろう。中東紛争の結果、日本は石油の輸入を分散させたが、日本の輸出依存を根本的にはなら解決していない。輸入国を分散させてはいるが、中東依存からはなら脱却しておら

ず、日本と中東との関係は切っても切れないものになりつつある。図 10 を見てもわかるとおり、9 割を中東からの輸入に頼っており、石油は様々なものに加工され他国に輸出されている。加工貿易国にとって石油は重要な資源なのである。

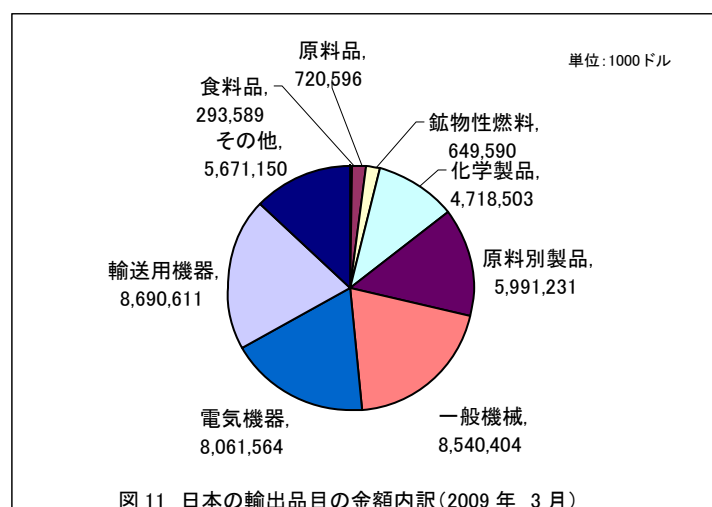


出典：『資源エネルギー庁日本のエネルギー2006 図表一覧』より作成

### 3.2 日本のレアメタル依存

この節では日本の加工貿易の主力である自動車、PC などの製品において使用されているレアメタルについて考察し、石油と同じく重要な存在だということを述べたい。

日本の加工貿易の主力は自動車や電子製品等であり、それらを製造するためには半導体や燃料電池が必要であるが、それには日本ではほとんど生産されていない※レアメタル<sup>2</sup>などが必要だ。図 5 でみると 2009 年 3 月現在、日本の輸出品目の総額は 43,337,236,000 ドルでその内、車が含まれる輸送用機器は 8,690,611,000 ドル、電子機器が含まれる機械類は 16,601,968,000 ドルとレアメタルが必要だと思われる物の割合は約 6 割と非常に大きな割合であることがわかる。



出典:『ドル建て貿易概要 - ジェトロ - 日本』より作成

日本はレアメタルの消費量が多く、その大半を輸入に頼っている。レアメタルの生産国は世界中に散らばっており、一見安定供給できるように考えられるが、生産国の政情が不安定であり、安定供給が心配されている。また、世界全体の問題ではなく日本だけの輸入相手国とのリスクもある。現在は沈静化しているものの中国とは歴史問題での摩擦があり、オーストラリアとは捕鯨問題での摩擦が存在している。ロシアとは領土問題も抱えており、日本はこれらの国から大量に資源を輸入している。これらの国の世論が加熱してくれば、政治問題が貿易摩擦に発展するかも知れない。日本は資源を必要としながらも、弱い立場にある。

ここでいくつかの重要なレアメタルと産出国、埋蔵量、消費量などを考察する。基準はレアメタル備蓄 7 鉱種とハイブリット自動車に使用されているリチウムを考察したいと思う。また供給リスク対策として、短期的な供給障害に対応する備蓄制度について紹介したいと思う。この 7 種が備蓄対象になっている理由は、代替が困難で供給国が偏っているからである。

<sup>2</sup> 希少金属のこと。流通量や生産量が少なく、高価。

### ・リチウム

このレアメタルは主にリチウム電池に使用されている。主な産地がチリ、オーストラリア、中国、ロシア、アルゼンチンでリチウム電池はこれから重要が伸びてくると予想されるハイブリッドカーやPC用品などに使用されている。ハイブリッドカーへの採用などリチウム電池の需要の高まりにより石油以上に厳しい制約資源となる可能性がある。リスクとしてはチリが一番の貿易相手国であり、国内も大きな問題を抱えてはいないが国際的には獲得競争が始まっている為、日本もチリの権益を確保する必要がある

表 1

|      |         |          |             |           |
|------|---------|----------|-------------|-----------|
| リチウム | 埋蔵量     | チリ 73.2% | 中国 13.2%    | ブラジル 4.6% |
|      | 生産国割合   | チリ 39.3% | オーストラリア 18% | 中国 14.2%  |
|      | 輸入相手国割合 | チリ 63%   | アメリカ 18.6%  | 中国 11.1%  |

### ・ニッケル

ニッケルはメッキやステンレス鋼や硬貨、ニカド電池などの原料として使用される。この金属は日本国内において産業上重要性が高いものの、産出地に偏りがあり供給構造が脆弱で、日本では国内で消費する鉱物資源の多くを他国からの輸入で支えている。一番の輸入相手であるインドネシアとは問題は抱えていないが、埋蔵量が一番のオーストラリアと生産高が高いロシアとは前述のとおり捕鯨問題や領土問題を抱えているため、リスクが存在している。

表 2

|      |         |               |             |               |
|------|---------|---------------|-------------|---------------|
| ニッケル | 埋蔵量     | オーストラリア 37.5% | ロシア 10.3%   | キューバ 8.8%     |
|      | 生産国割合   | ロシア 20.5%     | カナダ 16.5%   | オーストラリア 12.6% |
|      | 輸入相手国割合 | インドネシア 44.8%  | フィリピン 13.6% | ニューカレドニア 12%  |

### ・クロム

硬く、光沢がありメッキの材料としてもよく使用される鉄やニッケルと合わせるとステンレスにもなる。生産と輸入割合が高い南アフリカは近年までアパルトヘイトなどを実施しており、国内の政情にも不安を抱えていたが、今では実施しておらず、日本とも国際的な問題は抱えていないため、他の7種よりリスクは高くないと思われる。

表 3

|     |         |              |              |              |
|-----|---------|--------------|--------------|--------------|
| クロム | 埋蔵量     | カザフスタン 61.1% | 南アフリカ 33.7%  | インド 5.3%     |
|     | 生産国割合   | 南アフリカ 40.5%  | インド 23.4%    | カザフスタン 19.6% |
|     | 輸入相手国割合 | 南アフリカ 48.9%  | カザフスタン 28.1% | インド 11.1%    |

### ・コバルト

医療用として使用されるほか、磁性が強いため、磁石用途にも用いられる。また、他の金属に添加して合金とすることで、高温時の磨耗に強く、腐食しにくいいため、合金材料としての需要も多い。日本ではほぼ輸入に頼っているため、ニッケルと同様に備蓄制度がある。最大の産地は政情不安を抱えているコンゴであるが、輸入国ではフィンランド、オーストラリアが主な取引相手。ただ、埋蔵量のトップ3のコンゴは国内の政情に不安を抱え、オーストラリアとは捕鯨問題がある。またキューバは世界的に孤立している国家のため、将来的なリスクが高くなる可能性がある。

表 4

|      |         |              |               |            |
|------|---------|--------------|---------------|------------|
| コバルト | 埋蔵量     | コンゴ 48.6%    | オーストラリア 20%   | キューバ 14.3% |
|      | 生産国割合   | 中国 24.1%     | フィンランド 16.3%  | カナダ 9.5%   |
|      | 輸入相手国割合 | フィンランド 30.9% | オーストラリア 17.4% | カナダ 13.9%  |

#### ・マンガン

一般的な用途としてはマンガン電池に使用される。合金としてマンガン鋼、フェロマンガに使用される。マンガンのリスクは輸入相手国の半分が中国とオーストラリアということだろう。何回も主張しているとおり、この2国とは歴史問題や捕鯨問題など、上手くいっているとは言えないためリスクが高いと考えられる。

表 5

|      |         |             |             |               |
|------|---------|-------------|-------------|---------------|
| マンガン | 埋蔵量     | ウクライナ 61.1% | インド 21.1%   | オーストラリア 16.6% |
|      | 生産国割合   | 中国 40.5%    | 南アフリカ 17.3% | オーストラリア 15.1% |
|      | 輸入相手国割合 | 南アフリカ 36.5% | 中国 26.4%    | オーストラリア 26%   |

#### ・タングステン

スウェーデン語で「重い石」という意味のタングstenは硬度が高いため、切削用工具に用いられることが多い。また砲弾や徹甲弾に使用されることが多い。

リスクとしては、埋蔵量、生産の割合、輸入相手として中国がほぼトップであるということである。もし中国との関係がこじれてしまえば、タングstenの確保が非常に難しくなる。非常に近い国であり、地理的な問題は無いが、一国に資源が集中し、国家同士の問題も存在しているため、リスクが高いと考えられる。

表 6

|         |         |          |           |           |
|---------|---------|----------|-----------|-----------|
| タングsten | 埋蔵量     | 中国 62.1% | カナダ 9%    | ロシア 8.6%  |
|         | 生産国割合   | 中国 89.5% | ロシア 4.5%  | ボリビア 1.5% |
|         | 輸入相手国割合 | 中国 83.2% | アメリカ 7.6% | ドイツ 2.8   |

#### ・モリブデン

工業用の潤滑油やエンジンオイルに使用される。また銅との合金はハイブリットカーの

電子基盤にも使用されるため、需要は高くなると予想できる。

輸入相手国はチリが一番高いため輸入に関しての不安は少ないといえるかも知れないが、将来的には埋蔵量の多い中国とアメリカとの取引になると予想できる。このレアメタルも中国との関係が重要になってくる。

表 7

|       |         |            |            |            |
|-------|---------|------------|------------|------------|
| モリブデン | 埋蔵量     | 中国 38.4%   | アメリカ 31.4% | チリ 12.8%   |
|       | 生産国割合   | アメリカ 31.9% | 中国 23.4%   | チリ 23.3%   |
|       | 輸入相手国割合 | チリ 43.1%   | 中国 15%     | メキシコ 12.9% |

### ・バナジウム

用途は、製鋼添加剤としての用途が 8 割以上を占めているが触媒としても重要であり、高層ビルの構造成材、スパナやレンチなどの機械用工具、切削工具、対衝撃工具、金型工具、などに使用される。

輸入相手国は南アフリカがトップであるが、中国からの輸入量も低くはない。埋蔵量としては、ロシア、中国、南アフリカであり、上位 2 カ国との関係が重要だが、ロシアとは領土問題、他のレアメタルでも述べたが中国との諸問題もあり、将来的なリスクは高いと予想できる。

表 8

|       |         |             |           |             |
|-------|---------|-------------|-----------|-------------|
| バナジウム | 埋蔵量     | ロシア 38.5%   | 中国 38.5%  | 南アフリカ 23.1% |
|       | 生産国割合   | 南アフリカ 40.1% | ロシア 30.1% | 中国 28%      |
|       | 輸入相手国割合 | 南アフリカ 40.8% | 中国 24.9%  | チェコ 13.9%   |

表 1～表 8 出典：『JOGMEC 資料（レアメタル備蓄データ集）』より引用

## 備蓄の実施状況

表 9

| 制度   | 国家備蓄                                  | 民間備蓄                       |
|------|---------------------------------------|----------------------------|
| 実施団体 | 独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構                 | 民間企業(財)国際鉱物資源開発協力協会がとりまとめる |
| 対象鉱種 | ニッケル、クロム、タングステン、コバルト、モリブデン、マンガン、バナジウム |                            |
| 保管場所 | 茨城県の備蓄倉庫において一元集中管理                    | 民間企業が個別保管管理                |
| 目標   | 国内基準消費量の 42 日分                        | 国内基準消費量の 18 日分             |
|      | 合計 国内基準消費量の 60 日分                     |                            |

出典：『JOGMEC Virtual 金属資源情報センター 金属資源部門について』より引用

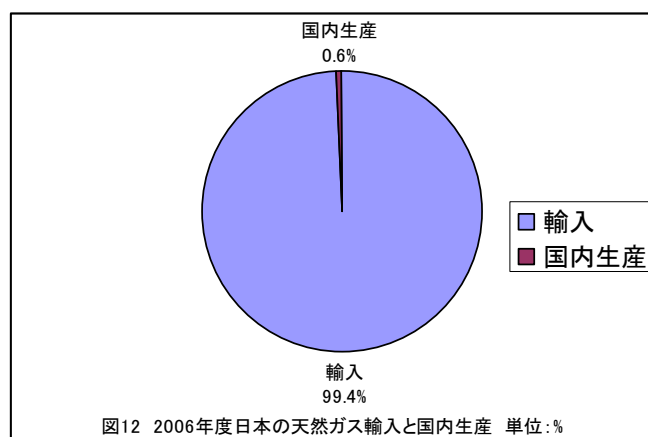
日本の輸出品のほとんどが工業製品であり、その中には半導体が入っている。またレアメタルは半導体以外にも携帯電話や液晶の筐体にも使用されているのでレアメタルがなけ

れば最先端技術製品を製造できないのである。そのためレアメタルの備蓄制度があるのだが備蓄は 2 ヶ月分しかなく、産出国が輸出をストップしてしまえば日本の製造業は事実上なにも出なくなってしまう。日本にとってレアメタルの問題は石油より重要な問題になるかもしれない。産出国の輸出がストップして、備蓄日数が過ぎてしまえば日本の経済は停止してしまう。

### 3.3 日本の天然ガス依存

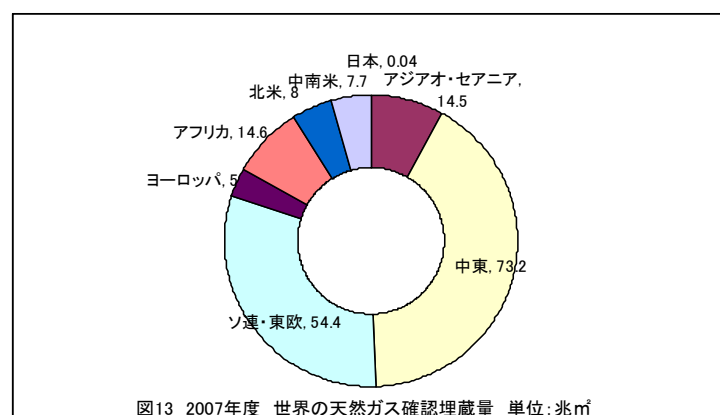
この節では日本の天然ガス依存を考察する。

石油、レアメタルの次に日本に足りない資源は天然ガスであるが、石油やレアメタルと同じくほぼ輸入に頼っている。



出典：『JOGMEC 日本の資源とエネルギー ― 日本の石油天然ガス事情』より作成

天然ガスは日本には殆ど存在していない。世界の天然ガスの確認埋蔵量は 177.4 兆 $\text{m}^3$ だとされているが、日本の生産量はそのうち 0.04%であり極めて少ない数字だといえる。逆に多い地域は中東の 73.2 兆 $\text{m}^3$ 、旧ソ連・東欧地域の 54.4 兆 $\text{m}^3$ であり、地域によってかなりの格差が存在していることがわかる。つまり、天然ガスも産出国に依存しなければいけ



出典：『天然ガスについて 世界の確認埋蔵量の分布と日本の主なガス田』より作成

ないのである。そして身近な天然ガスの問題としては、※東シナ海のカス田問題<sup>3</sup>である。問題となっているカス田は両国の排他的経済水域内にあり、日本はその範囲を現在国際的に一般的な日中中間線とするのに対し、中国は 1970 年代頃までの国際法上の解釈に基づく大陸棚の先端沖縄トラフまでを主張しているため、その中間にあるカス田をどちらの国が採掘するかという問題である。このように資源を巡る争いは世界中に存在しており、いかに国の経済活動を支えるために資源が必要だということがおわかり頂けたらうか。

1 節、2 節、3 節で石油、レアメタル、天然ガスが日本に殆ど存在しておらず、ほぼ輸入に頼っていることがおわかりいただけたらうか。これらの資源は日本が加工貿易や経済活動を行う上で重要な資源であり、資源の乏しい日本はこれまで技術力やメイド・イン・ジャパンのブランドイメージでこれらの資源を確保してきた。しかし、グローバル化が叫ばれている現代においてどれだけその優位性を保っていけるのだろうか。日本が世界に誇る技術力が他国に追い抜かれてしまった場合、日本はどのように資源を確保し経済活動をしていくのか。日本にとって技術力は唯一無二のもので、絶えず成長させていかなければ、日本は普通の技術しか持たない国になり、日本は破綻してしまうだろう。次の第 4 章では日本の技術力やブランドの危機を述べたいと思う。

---

<sup>3</sup> 日本は国際司法裁判所や国連海洋法裁判所に付託する事を中国に要請しているが中国はこれに応じていない。

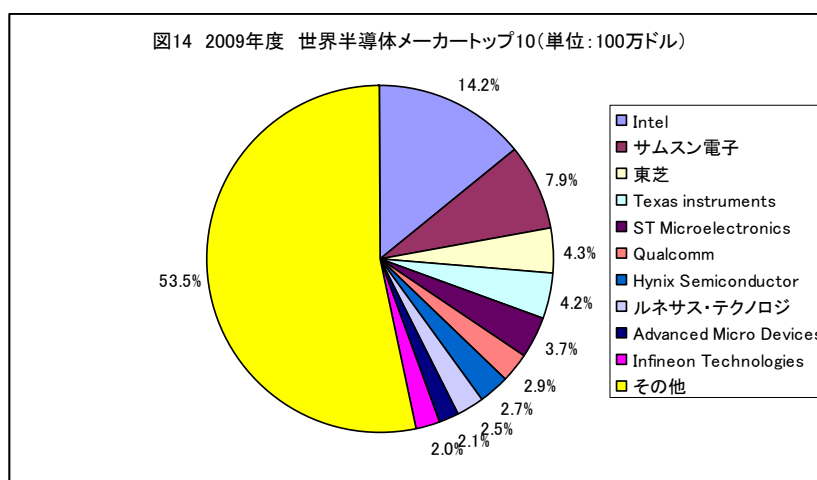
## 4 低下する日本の技術とブランド

日本は世界に向けて、レアメタルを多く使用する自動車や電化製品などを輸出してきたが、今それが危機を迎えている。その危機の原因を考察したい。

### 4.1 追い抜かれる日本製品

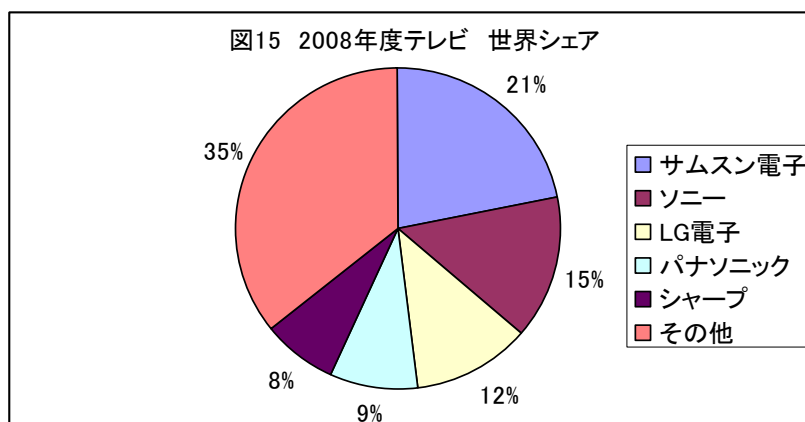
この節では日本とアジア各国とのシェアを考察したいと思う。

日本の経済をこれまで支えてきたのはメイド・イン・ジャパンのブランドと言ってもいいだろう。しかし、今それが危機を迎えているのだ。ここでは日本製品の代表として半導体とテレビを例に挙げてみたい。



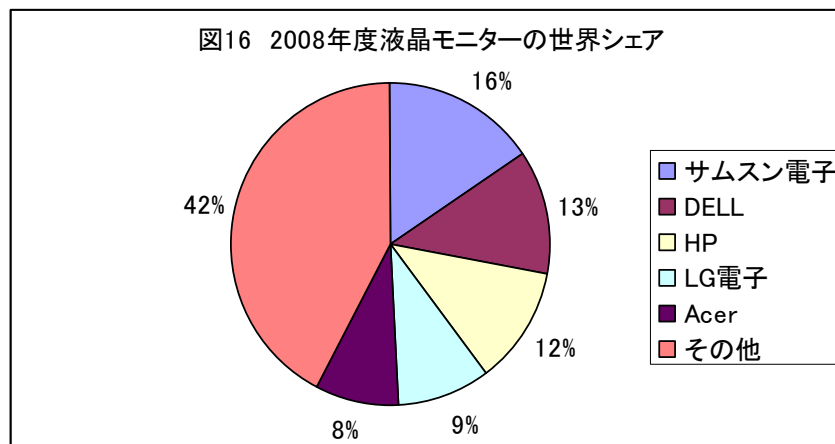
出典：『ガードナープレスリリースガードナー速報』より作成

図14は2009年度の世界の半導体メーカーのシェアである。1位はCMでもおなじみのIntel社だが、2位は日本のメーカーではなく、韓国のサムスン電子で、3位に東芝がランクインしている。東芝は他の日本企業と合わせてもサムスン電子のシェアに届くかどうかである。



出典『薄型液晶テレビ・PC液晶モニター、世界シェア・ランキング2008年』より作成

図 15 は 2008 年度のテレビの世界シェアだが、サムスンが 2 位のソニーを大きく引き離しており、またメーカーを国別に考えれば日本と韓国の 2 大勢力となっはいるが、国別の視点でみれば日本は韓国に負けていることがわかる。



出典：『薄型液晶テレビ・PC 液晶モニター、世界シェア・ランキング 2008 年』より作成

図 16 は液晶モニターの世界シェアだが、日本企業はトップ 5 にランクインしていない。韓国、アメリカ、台湾のメーカーが主であり、サムスンの圧倒的シェアが目立つ。少し前までは日本企業が活躍していた分野が近年脅かされており、特に韓国やアジアメーカーの躍進が目立ってきている。輸出している日本製品が世界のトップクラスを争っていると、胸を張ることができるのは車ぐらいだろう。

#### 4.2 日本製品の停滞要因

この節では何故、日本製品が停滞しているかを考察し、今後への意見を述べたいと思う。

日本製品が韓国や他のアジアのメーカーに何故取って代わられたのかを考えると、避けて通れないのがコストの高さである。ひと昔前まではテレビや半導体は日本製が主流だったが、円の価値が高くなるにつれてコストも高くなり、販売価格もそれなりのものになった。そこが他国のメーカーが活躍するチャンスだったのだ。日本では貧富の差が世界に比べれば少ないが、外国では貧富の差が激しいため日本製品が売れない層もいると考えられる。日本製品は富裕層の購入するものであって、品質は二の次であり、半導体を使用するコンピュータは故障せずに動けば良いし、テレビも多少品質が落ちてでも映れば良いと思う層がいても不思議ではない。そのような層の人達には高い日本製品よりもお手ごろな韓国のメーカーやアジアメーカーの商品へ人気が移るのは自然だと言えるだろう。

また、日本のメーカーは日本で売れさえすれば世界でも売れると思いついでいたのではないだろうか。日本市場はガラパゴスとも言われており、変化が非常に少ない市場として有名である。日本製品が世界で売れていたときはそれでも良いかもしれないが、現代のグローバル社会では変化や進化のスピードがとても速く、その変化に取り残されて初めて他国のメーカーの台頭を知ったのかもしれない。つまり危機意識の欠如があったと言える。

例え質の良い商品を作っても利用する人達から支持されなければ意味が無い。これからの時代は海外へ製品を輸出するには画一的なものではなくて、その土地の経済や文化に合わせた柔軟な商品展開をしていかなければ日本メーカーは生き残れないだろう。日本の代表的な電子機器メーカーのソニーと韓国の代表的な電子機器メーカーのサムスンの46型液晶テレビの値段を比較してみるとソニーは22万～23万、サムスは14万～15万くらいが相場であった。日本人であれば多少高くてもソニーを選ぶかもしれないが、図15で示している通りある程度の品質さえあれば、世界の消費者は安さを求める。

写真1



ソニー46型テレビ 22万～23万



サムスン 46型テレビ 14万～15万

出典：『amazon』より作成

1節、2節、3節でも述べたが、日本の主な輸出品は電化製品や車であるが、電化製品は韓国やアジアのメーカーにシェアを奪われつつある。唯一世界でトップを争っている車業界も20年くらいすれば他国のメーカーに追いつかれシェアを逆転されるかも知れない。技術というものはいくらでも模倣や盗むことができる。唯一の日本の生命線である技術の停滞が起きたら、日本は何を輸出し世界各国と貿易をして利益を得ることができるのだろうか。その解決策として、次の第5章では日本の新たな輸出品を考察したい。

## 5 新たなブランド

この章では日本が既存の電化製品や車のブランドだけではなく他国にあまり模倣されない分野のブランド確立の目指し方と輸出の方法を提案したい。

### 5.1 サブカルチャーの輸出

この節ではサブカルチャーの役割とは何かを考える。

外国に輸出されている日本の文化として有名なのはマンガ・アニメ・ゲームといったサブカルチャーが有名である。フランスやドイツといった西ヨーロッパなどではマンガが書店で沢山販売されており、非常に人気が高い。テレビのニュースなどでも紹介されているのを見たことがある人もいるだろう。日本のアニメやマンガを見て喜ぶ人達は 10 代～30 代ぐらいの世代であり、この世代は積極的に消費が多いと考えられる。この世代が日本にシンパシーを感じることができればその家族にも日本に対する良い印象を与えるかも知れない。たかがサブカルチャーがと思う人もいるかもしれないが、サブカルチャーの役割は非常に大きいと考えられる。

表 10

|                  |          |
|------------------|----------|
| フランスでの日本の漫画市場    | 約 74 億円  |
| ドイツでの日本の漫画市場     | 約 25 億円  |
| アメリカでの日本の漫画市場    | 約 200 億円 |
| 台湾、韓国、香港での日本漫画市場 | 約 250 億円 |

出典：『ドイツにおけるコンテンツ市場の実態（2009 年 3 月）』より作成

私は文化を輸出する際に大切な分野は、サブカルチャーだと考えている。根拠は戦後の日本にある。日本には戦後急速にアメリカ文化が流入する事でアメリカに対してシンパシーが生まれた結果、アメリカとのビジネスが成功したのではないだろうか。良いか悪いかは別としてアメリカにとって日本は文化を売る市場として非常に大きな存在であることは間違いない。サブカルチャーとは相手国とのビジネスを円滑に進めるために非常に大きな役割を占めていると考えられる。つまり、日本のサブカルチャーの受け入れに関して寛容な国、サブカルチャー市場が大きい国は他のビジネスの分野でも交流の可能性が高いといえる。ただし、注意しなければならない物は海賊版で、一つ一つの値段はそこまで高くはないものの、大量に出回ってしまえば著作権元や出版社、作者にとって損害を与えてしまう。海賊版対策がこのビジネスを今後も発展させる鍵である。

### 5.2 食文化の輸出

この節では日本の農作物の輸出について考察したい。

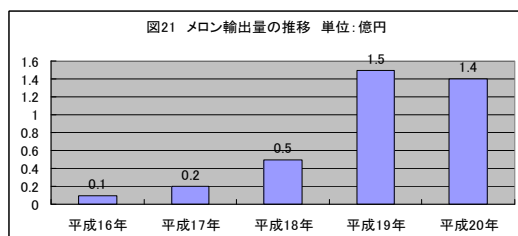
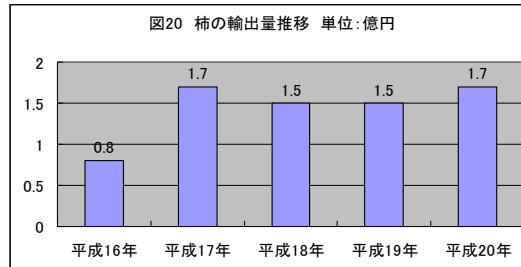
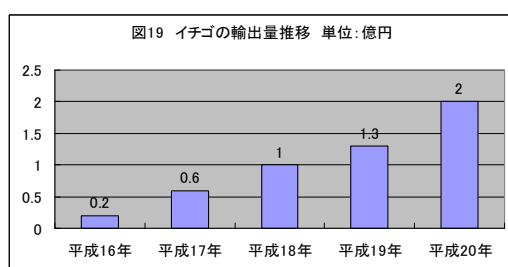
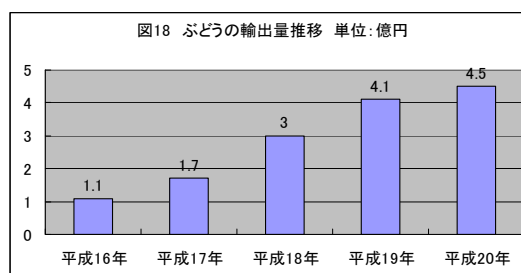
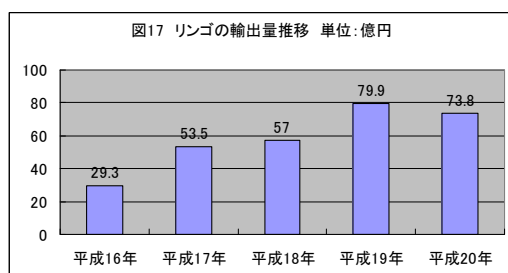
サブカルチャーの次に大事なものは食であり、日本の農作物を海外に積極的に輸出するこ

とが出来ればとても大きな市場になるのではないかと考えられる。食というものは子供からお年寄りまで必要なもので、日本産の安全の農作物を輸出できれば、農家の利益が上がるだけではなく、海外向けの新たなビジネスチャンスとなる。また農家の減少も防ぐことができるかもしれない。例えば台湾のデパートではりんご1個が250円から320円の高値で売られている。送り物用であれば、8個入りで5200円もする。ブランドとしての価値が高いようだ。

表 11

| 種類  | 主な輸出先              |
|-----|--------------------|
| イチゴ | 香港、台湾、韓国、シンガポール、米国 |
| リンゴ | 台湾、香港、中国、英国        |
| メロン | オマーン、香港、台湾など       |
| 柿   | 香港、台湾、タイ           |
| ぶどう | 台湾、香港、その他          |

出典：『特集1 ニッポンの「おいしい」は世界でもおいしい！（1）-2/2-』より作成



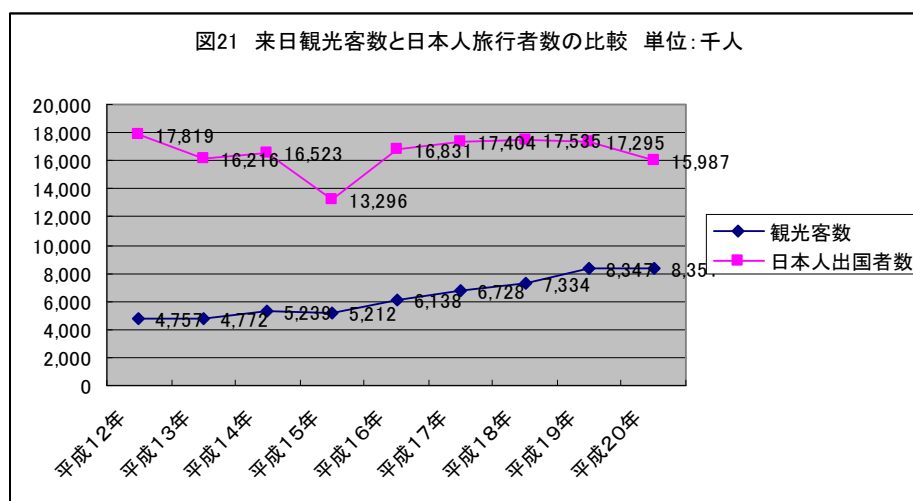
出典：『農林水産省 輸出統計』より作成

上の図は果物の輸出額を表している。ゆるやかではあるが果物の輸出額が増加している。

日本式の農作物や野菜は車や電子機器の技術と違い、目に見えて流出するものではなく、上手くブランドとして更に世界に広めることができれば巨大な市場となり、日本産の農作物にロイヤリティを付けて輸出する事が出来れば農業全体に大きな利益をもたらすことができる。また、日本の農作物に対して良いイメージを持たせることもできる。ただし課題もいくつかあり、表 11 にあるように貿易相手にアジアが多くなるということである。果物の本場であるヨーロッパには安全と品質が備わっているため、日本産を売り込むのには時間がかかるだろう。また、苗や種子が悪意のある相手に渡って勝手に違法に栽培されてしまえばこのビジネスは成り立たなくなる。セキュリティも十分に考えなければならない。こういったビジネスを阻害するために外国で日本野菜の名前が特許として登録されていることもあるので、法律に関する知識も必要だろう。

### 5.3 日本をアピール

この節では日本の魅力を世界に広めるための考察をしたい。1、2 節で日本のサブカルチャーや日本の食物などの輸出についての考察をしたが、やはり文化的な経済活動の最終目標は日本に観光に来て貰うことが望ましい。1 節、2 節のビジネスと日本の観光を組み合わせることができれば、日本が外国からみて魅力的な国になるのは間違いない。こちらから観光客に来て貰うのを待つのではなくて、文化などをこちらから積極的に発信することにより、より多くの観光客が日本に訪れるだろう。そうすれば観光地の財政は潤い、日本の宣伝にもなるので、一石二鳥である。



出典：『社会実情データ図録 図録▽海外旅行客数の推移』より作成

図 21 は平成 12 年から平成 20 年までの来日観光客数と日本人旅行者の比較である。来日観光客数と日本人旅行者の間には差があるということがわかるだろう。来日する観光客は少なく出国する日本人が多いということは日本人の稼いだ賃金が外国で使われてしまうことを意味している。せめてもうすこしだけ差が縮まらないだろうか。もう一押し観光客を呼ぶためには日本が素晴らしい観光地であるということをアピールしなければならないだ

ろう。また海外へ日本のサービス業が進出しても面白いのではないか。ホテルやファミリーレストランなど日本式のサービスなどを展開すれば、現地の人間に必ず受け入れて貰える日本だけに留まらず、こちらから現地の社会に日本式のサービスを売ることも検討しても良いだろう。

これからの時代はこれまでの産業は維持しつつ、形あるモノを売って利益を得る経済と形の無いサービスや文化、イメージといった底が尽きるものの無いモノを売って行く経済の両方を発展させていくことがこれからの日本にとって必要だ。以上が私の本論文を通じての提案である。

## 6 終わりに

私は本論文で日本の加工貿易に頼った輸出貿易の限界と新たな産業について執筆した。日本のような資源の乏しい国ではいずれ経済に限界が訪れるのではないかと考えていたからである。日本の場合は主な経済活動が工業製品の輸出だけであり、資源を輸入する側でもある。加工した工業製品を輸出する側でもある日本は資源を輸出する国と工業製品を輸入する国に常に板ばさみの状態である。

日本と対米中の貿易内容の比較、対ロシア・中東との比較を通じて、日本の貿易の実情を知ることができた。日本はこれらの国から石油を輸入し、輸入した資源を加工して貿易を行っているが、一度関係がこじれてしまえば日本経済が破綻してしまう可能性も実感した。

石油と同じくレアメタルも日本の産業の中心である車や電子機器にとって重要な資源である。そのレアメタルも世界の生産量が少ないにも関わらず、日本は有数のレアメタル消費国家という事実も忘れてはならない。そしてレアメタルだけでなく、天然ガスも日本はほとんど自分では生産できない。日本は資源の調達面で非常に弱い立場にあるということが本論文を通じて理解頂けたらう。

そして日本がリードしてきた電子機器の分野では現在、韓国やアジアのメーカーに追い付かれてきているのが実情であり、日本の高い技術を持ってしてもコスト面や安さには勝てない。グローバル社会では自国のことだけを考えていては立ち行かなくなる。これからは技術ではなく、目に見えないブランドや安心を売ることがこれからの日本にとって必要であり、世界的に有名であるマンガ産業や、日本の農作物、日本の観光などの文化をうまく売ることができれば日本のオリジナリティーを発揮できるだろう。今の内に新たな産業の土台を作ることが大切で、しっかりとした土台を作ることができれば日本は魅力ある国となり、貿易立国から文化立国への転換も決して不可能ではない。以上が私の論文の総括である。

## 参考文献

### 書籍

- [1] 福川伸次著, (2004), 『活力ある産業経済モデルへの挑戦』, 日経 BP 出版センター
- [2] 伊丹敬之 著, (1998) 『日本産業三つの波』, NTT 出版株式会社
- [3] 伊藤元重 著, (2000), 『通商摩擦はなぜ起きるのか』, NTT 出版株式会社
- [4] ミカエル・ツィンコータ／ジョン・ウォロノフ著, (1988), 『ジャパニーズマーケット』, 同文出版株式会社
- [5] 三菱総合研究所 著, (2007), 『徹底予測 これが新成長ビジネスだ!』, 日本経済新聞出版社
- [6] 雷新軍 著, (2003), 『日本の経済発展における政府の役割』, 藤原印刷株式会社
- [7] 嶋信彦 著, (2009), 『日本の「世界商品」力』, 集英社

### インターネット

- [1] 『JOGMEC 日本の資源とエネルギー』  
[http://www.jogmec.go.jp/about\\_energy/resources\\_oil/index.html](http://www.jogmec.go.jp/about_energy/resources_oil/index.html)
- [2] 『統計 経済産業省』  
[www.meti.go.jp/statistics](http://www.meti.go.jp/statistics)
- [3] 『日本の資源とエネルギー』  
[http://www.jogmec.go.jp/about\\_energy/resources\\_metal/index.html](http://www.jogmec.go.jp/about_energy/resources_metal/index.html)
- [4] 『資源エネルギー庁』  
[http://www.enecho.meti.go.jp/topics/energy-in-japan/energy2006html/graph\\_list.html](http://www.enecho.meti.go.jp/topics/energy-in-japan/energy2006html/graph_list.html)
- [5] 『JOGMEC Virtual 金属資源情報センター』  
[http://www.jogmec.go.jp/mric\\_web/organization/japan/g3/index.html](http://www.jogmec.go.jp/mric_web/organization/japan/g3/index.html)
- [6] 『IT 機器の廃棄・リサイクル(1)今そこにあるレアメタル危機』  
[http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/COLUMN/20071128/288182/?ST=green\\_it](http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/COLUMN/20071128/288182/?ST=green_it)
- [7] 『石油連盟 石油統計情報 今日の石油産業データ集』  
<http://www.paj.gr.jp/statis/data.html>
- [8] 『ジェトロ 日本貿易振興機構』  
<http://www.jetro.go.jp/indexj.html>
- [9] 『財団法人天然ガス導入促進センター』  
<http://www.naturalgas.jp/index.html>
- [10] 『社会実情データ図録』  
<http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/index.html>
- [11] 『農林水産省』

<http://www.maff.go.jp/>

[12] 『ガードナー ジャパン』

<http://www.gartner.co.jp/press/html/pr20091221-01.html>

[13] 『MEMORVA』

<http://memorva.jp/>

[14] 『青森のうまいものたち』

<http://www.umai-aomori.jp/>

[15] 『amazon』

<http://www.amazon.co.jp/>

#### 新聞記事

[1] 『リチウム、カナダから大量調達』 日本経済新聞 朝刊 平成 21 年 7 月 8 日 1 ページ

[2] 『資源立国ベネズエラ、巨大油田本格開発へ』 日本経済新聞 朝刊 平成 21 年 7 月 3 日 27 ページ

[3] 『鉄鋼海外大手と提携強化』 日本経済新聞 朝刊 平成 21 年 6 月 26 日 9 ページ

[4] 『育児用品、新興国開拓急ぐ』 日本経済新聞 朝刊 平成 21 年 5 月 19 日 13 ページ

[5] 『ロシア 180 件の協力要請』 日本経済新聞 朝刊 平成 21 年 5 月 29 日 1 ページ

[6] 『苦境の半導体 再編始動』 日本経済新聞 朝刊 平成 21 年 4 月 28 日 9 ページ

[7] 『キリン、豪社と完全子会社化合意』 日本経済新聞 朝刊 平成 21 年 4 月 28 日 10 ページ

[8] 『新日鉄、新興国で足場固め』 日本経済新聞 朝刊 平成 21 年 4 月 24 日 9 ページ

[9] 『CO<sub>2</sub> 地中埋蔵に参入』 日本経済新聞 朝刊 平成 21 年 4 月 23 日 11 ページ

[10] 『バイオ燃料、日本市場で拡大競う』 日本経済新聞 朝刊 平成 21 年 4 月 22 日 11 ページ